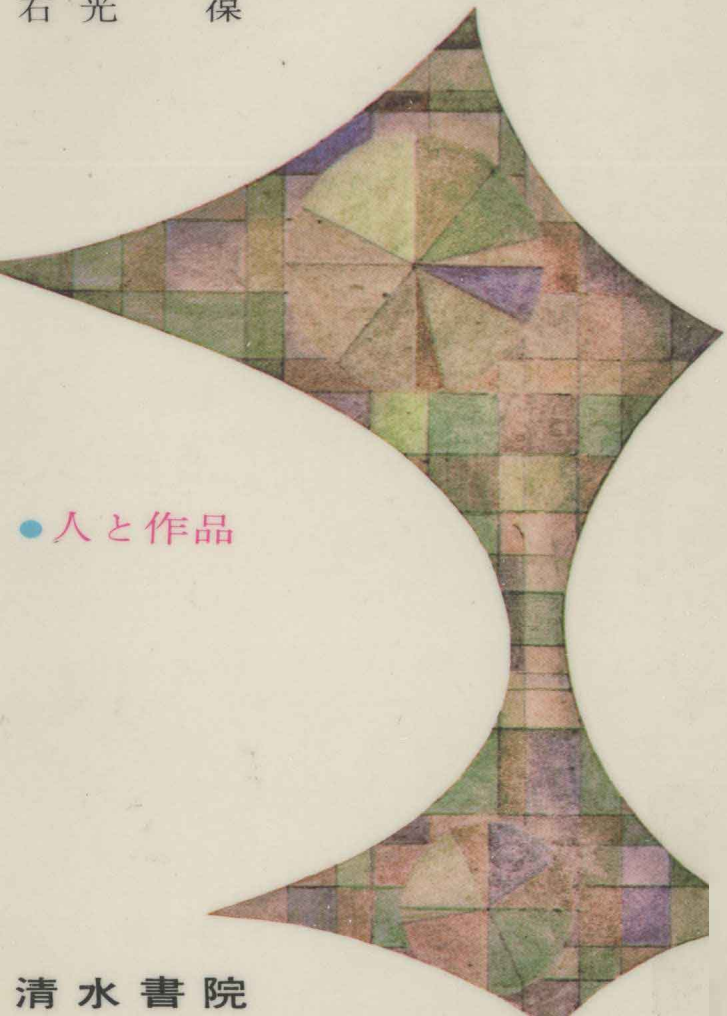
Century Books

高見　順

石光　葆



●人と作品

清水書院

高見順　人と作品 31　定価はカバーに表示

昭和44年6月20日　第1刷発行©
昭和54年6月30日　第3刷発行

・著　者……石光　葆（いしみつ　しげる）
・発行者……野村久也
・印刷所……柳沢印刷所
・発行所／清水書院／東京都新宿区東五軒町5
Tel・東京（260）5261～6／振替・東京3-5283
郵便番号　162

検印省略

落丁本・乱丁本は
おとりかえします

CenturyBooks　清水書院

高見　順

●人と作品●

31

石光　葆著

CenturyBooks　清水書院

原文引用の際、漢字については、
できるだけ当用漢字を使用した。

序

この「人と作品」シリーズは、立教大学日本文学研究室の大学院に籍をおく新進の学究者を中心として、福田清人教授監修のもとに、それぞれ日ごろ研究している作家を一本にまとめたもので、いずれも若々しい神経と柔軟な頭脳で対象を掘り下げ、流麗な筆で巧みに解説している。

ところが、わたくしは番外なのである。某日、先輩福田清人氏から、「君は高見順の友達だからよく知ってるだろう、書いてくれ」といわれた。なるほど学生時代から死に至るまで四十年近く、同人雑誌の仲間として、友人としてつきあってきたが、べつに高見を「研究」はしていないし、またわたくしは「学者」でも「評論家」でもないので、とまどった。が、とにかく引き受けたのである。

高見順の文学や人間に関する論評は、かれ自身がつねに新しい問題を提起する男だっただけに、それに誘発されるかのごとく、これまでにも数多く見うけられた。しかし、ほとんどは新聞・雑誌に発表される程度で、まとまった高見順研究の書というのは、後日をまつしかないようである。ましてや伝記に類するものは、死して歳月も浅いせいか、まだお目にかかったことがない。本書をもって嚆矢とするのではあるまいか。

それにしてはお粗末で、申しわけない。昭和文学の担い手であった高見順の本格的な研究の書をかくのは、わたくしの柄ではなく、おまけに紙と時間の制約があったからでもあるが、やがて現われるであろう高

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

見順研究のための、手がかりともなれば幸いであるし、その礎石となるためにもできるだけ記述の正確を期した。ことに終戦後から晩年にかけては、人びとの記憶も新しいし、日記をはじめ多くの文献もあることゆえ、世にあまり知られていないような、または忘れられたような青年時代に最も力をそそいだ。ために、そちらに紙幅を費やしすぎてアンバランスとなり、まだまだ不十分なので、今後の研究家に俟つところ大である。

執筆に際しては、秋子未亡人に資料や写真のご提供をあおぎ、横須賀市立図書館長・竹田平氏、日暦同人・砂原彪氏、そのほかの方々にもご協力いただいたことを感謝する。

石光葆

目次

第一編　高見順の生涯

日陰の生態……八
自我の模索……三七
昭和文学の選手……五五
病魔との対決……九四

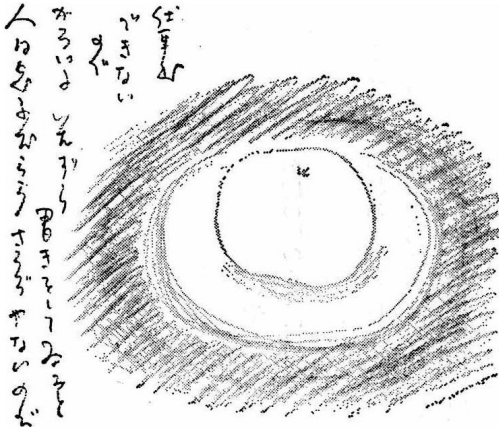
第二編　作品と解説

故旧忘れ得べき……一三一
外資会社……一四二
如何なる星の下に……一五四
水　面……一六九
いやな感じ……一七七

年　譜……一九五
参考文献……二〇一
さくいん……二〇三

（カットのスケッチ、デッサンは高見順筆）

第一編　高見順の生涯



日陰の生態

「喜びを以つて誕生を迎えられなかつた子供の運命――私は今に至るも、生れて四十年経つた現在でも、それも紆余曲折を経たのちの今においてなお、私のうちにその暗い運命の影を、いや、黒い運命の、わが身にしみついたしみといつたものを感じないわけには行かない。」（「わが胸の底のここには」）

呪われた出生

生まれるべくして生まれた生命は喜びをもって迎えられるが、高見順の出生は、権力に威圧された庶民の悲劇として、生まれる前からすでに暗い影におおわれていた。

「私の父親のS-はN-家からS-家へ入つた養子なのだが、私の母親と会う少し前に家付の娘であるその妻を失つていた。母親が北陸の港町で会つたときの父親はその県の知事であつた。私は今から十年前にある小説（「私生児」）のなかで次のようなことを書いたが、その『夜伽*』云々**は私のいまいましい推量に過ぎなかつた。そしてこの小説を私が書いたときは父は枢密顧問官として在世中であつた。

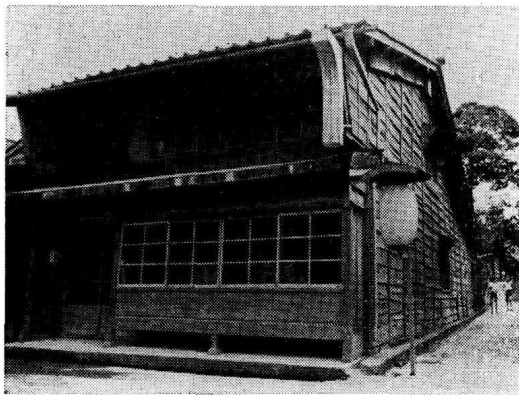
*夜のサービス。

**天皇の顧問役として重要な国務を審議するため、勲功者、または学識経験者から選ばれた。

△△氏が初めて私の母親を見たのは、彼が福井県知事として県下巡察の砌、M-町に来た時で、日露戦争当時の風習として食事の給仕に選ばれた素人娘が夜伽のつとめもせねばならなかったものかどうか、私はこれを詳かにせぬが、母親は不幸にもその時、私といふ因果な子を胎んだのである。やがて私は、恐らく△△氏の呪ひを受けつつ、なんにも知らない呱呱の声を挙げた。」

自伝小説である「わが胸の底のここには」で、高見はこう語っている。官尊民卑の風潮の強かった明治時代には、県知事の権威は県民にたいしては絶対的なものであったのだろう。おまけに当時、三国町では鉄道敷設のために猛運動を展開し、陳情なども盛んにやっていた。そこへ県知事の来臨である。好機逸すべからずと、政略的な意味をもって、三国小町とうたわれていた高見の母がいけにえにされたとも解される。

こうして高見順（本名、高間芳雄）が、近くに東尋坊の断崖をひかえ、日本海の荒波がうちよせる小さな漁港の福井県坂井郡三国町平木に生まれたのは、明治四十年（一九〇七）一月三十日であった。それも月足らずで生まれ、何かの都合で届けが遅れて、戸



福井県三国町の生家

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

母親　高間古代

籍面では二月十八日生となっている。――これが高見順年譜の定説であったが、平野謙が新説を発表した。すなわち「昭和三十九年の秋、まだ病床にあった高見さんの口から聞いたところによると、どうやら実際には明治三十九年十二月の生まれだった、ということである。高見さん自身も近年そのことを知ってびっくりしたらしく、それについて随筆みたいなものを書いておきたい、と語っていた。」（『毎日新聞』昭和四十一年九月十六日）

明治四十年はヒツジ年である。しかし、節分前の一月三十日は、昔風にいえばウマ年にあたる。「ヒツジよりは私は、威勢のいいウマのほうが好きだ。」と高見はいっているが（『ちょっと一服』の「牛のしっぽ」）、明治三十九年なら当然ウマ年である。さらに、

「私は子供のときヒツジ年だと言われたことで、自分はあのおとなしい、モグモグと紙を食っているヒツジなのだと思いこんだ。先天的にヒツジのような人間に生まれついているのだと思うことで、自分の性格を自分でヒツジのようにしたところがずいぶんとあるようだ。」

と、幼時の自分を回顧している。ここにも、そしてこういう感じ方に、高見順の暗い宿命的な影が尾をひいていると言えなくもない。しかし、はじめから明治三十九年ウマ年生まれと知っていたなら、こういう感じ方はしなかったかもしれない。

出生の秘密については、高見はこれ以上なにも知らなかった。知ろうともしなかった。母親の古代も詳しくは語らなかった。おたがいにそのことに触れるのがつらくて、悲しくて、不快なので、ことさら避けていたのである。しかし高見の没後、郷里に往時のことを知っている古老や、高見の赤ん坊時代の子守りの女性が生存していることが判明し、それらの口うらを総合すると、県知事と古代との交際はしばらく続いたようである。また高見は、「あんなきれいな赤ちゃん見たことがない」と子守りが感嘆したほど可愛く美しかったそうだ。

高間古代は母コト（高見にとっては祖母）のひとり娘であった。コトもまたひとり娘で、代々「覚前屋の六兵衛」と呼ばれて庄屋をつとめたこともある旧家を継ぐために養子をもらったのだが、その養子が道楽者で身上をつぶし、古代を生ませたまま家出してしまった。高見もまた、ひとり子である。母子三代ひとり子の家系を、高見は「路傍の雑草」といっている。そして、「これがこの私にはふさわしい。」と謙虚ではあるが、運命の子の悲しさ、いたいたしさをにじませている。

文才の血筋

ところが父親のほうは、「雑草」ではなかった。だから、父親のまともな子なら卑下することはないのだが、戸籍面では高間古代の私生児でしかなかった。父の坂本鈔之助には抱かれたこともなければ、顔を見たこともないのだから、憎しみをいだきこそすれ、愛情のひとかけらも感じられなかったのは無理からぬことである。当時、私生児というものがどんなに世間から軽蔑され、迫害され

父親　坂本彩之助

たか、民主主義のこんにちでもその傾向はなきにしもあらずだが、今とはくらべものにならぬほどひどかった。たとえば、東京府立一中を受験しようとした高見少年は、友だちから「府立は私生子は入れないんだよ」といわれてカッとなり、その友だちよりも母親を恨んだ。

「――僕、いやなんだ。私生子なんて、いやなんだ。お母さんはどうして僕なんか生んだの。私生子なんかどうして生んだのさ。馬鹿、馬鹿！」

と、泣きながら母親にくってかかった。学校なんかどうだっていい、入れてくれたってはいってやるもんかとまで思いつめたものである。

父親の坂本彩之助は旧尾張藩士永井匡威の三男で、明治十五年（一八八二）元老院議官の坂本政均の養子となり、内務省にはいってのち、福井・鹿児島県知事、名古屋市長、明治四十四年貴族院議員、昭和九年枢密顧問官と栄進した。（なお、彩之助は土ヘンの坂の字を嫌い、公文書以外は阪を用いた。）

彩之助の長兄の久一郎は尾張藩儒鷲津毅堂の門下で、禾原または来青と号し、明治漢詩人中の逸材として『来青閣集』全十巻（大正二年）の漢詩の著がある。この久一郎の長男壮吉（明治十二年十二月三日生）が荷風で

＊明治前期の立法府たる元老院を構成する議官で、華族、官吏、勲功・学識ある者から選任された。

あるから、永井荷風と高見順は従兄弟になるわけである。坂本彰之助も三蘋と号して漢詩にすぐれ、その作品は改造社の『日本文学全集・漢詩篇』に収録され、筑摩書房の『明治文学全集』第六十二巻『明治漢詩文集』（未刊）にも収録候補となっている。その子阪本越郎は高見の異母兄だが、この人も詩人として『暮春詩集』『果樹園』『海辺旅情』など多くの詩集を出し、お茶の水大学で教鞭（心理学）をとっている。

こうしてみると高見には、生まれながらに文才ゆたかな血が流れていたわけで、作家として伸びたことは突然変異ではなかった。

永井荷風

高見順が生まれたころは、永井荷風はアメリカ留学からフランスへと洋行中であった。外遊前も多くの小説を発表したが、帰朝後は「あめりか物語」「ふらんす物語」でさらに文名を高め、高見が文壇へ出たころは荷風は「つゆのあとさき」や「濹東綺譚」などの名作を書いて、おしもおされもせぬ大家であり、大先輩であった。しかし、作家としての荷風を高見は尊敬しながら、まともに会ったこともなかったのは、父の家系にたいする反発であったのだろうか。

昭和十三、四年というと、高見は丹羽文雄や石川達三などとともに新進作家としての地歩をきずき、はなやかな活躍ぶりが注目されていた。永井荷風がそれを知らぬはずはないと思うのだが、そのころの次のようなエピソードが、伝説のように伝えられてい

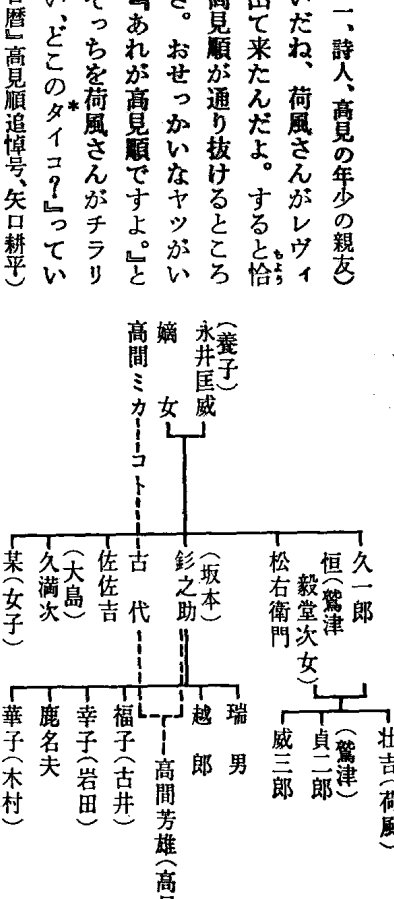
る。

「倉さん（倉橋弥一、詩人、高見の年少の親友）がいう――こないだね、荷風さんがレヴィウ小屋から外へ出て来たんだよ。すると恰度向うの路次を高見順が通り抜けるところだったってわけさ。おせっかいなヤツがいて、荷風さんに『あれが高見順ですよ。』と伝えた。するとそっちを荷風さんがチラリとみて、『いったい、どこのタイコ*？』っていったそうだ。」（『日暦』高見順追悼号、矢口耕平）

高見のすらりとして和服を着こなした姿はタイコみたいだが、この話の真偽のほどはわからない。事実としたら荷風もなかなか皮肉で、手ごわいおじさんである。どうやら高見が「荷風さんにぶつかってみても、どうせおれのことなんて歯牙にもかけないだろう」といったことから、脚色されたものらしい。

その高見も文壇的地位がどうにか固まりかけてきたころ、荷風に近づきたいと思ったことがあるのかどうか、荷風日記に次のような記述がみえる。

＊太鼓持ち、幇間ともいう。客に従い、宴席に侍して遊興を助ける男芸者。



高見順の家系図

「昭和十五年九月十三日　（前略）文士高見順屢楽屋に来り余に交際を求めむとすと云ふ。迷惑甚し。」（岩波版『荷風全集』第二十三巻）

荷風は「迷惑甚し。」といっているが、果たして高見がほんとうに「交際を求めむと」したかどうかには、疑問がある。いや、「私は『荷風に近づこうと追いまわした』ことなど一度もない。絶対にない。」と、高見は昭和三十八年五月十九日の日記に断固と書いている。（『世界』昭和四十二年十一月号）

高見のこの文章は、そのすぐ前に引用している東京新聞の夕刊「大波小波」の記事にたいする否定なのである。記事は永井荷風の日記に関するもので、そのなかの次のような文句の、最後の「追いまわした」にたいして高見は憤慨したのだ。

「北原武夫、高見順、佐藤春夫など、（荷風に）コッピドク書かれている作家の代表だが、これも河盛（好蔵）のいうように、おおかた側近取り巻きのおためごかしなご注進によって書いているのだから世話はない。荷風がいかにイヤなヤツであったかを物語るだけで、北原、高見などのキズつく話ではない。若気の至りで、荷風に近づこうと追いまわしたのが、きらわれるモトになっただけのことである。……」

ここにも「おおかた側近取り巻きのおためごかしなご注進によって書いている」とあるが、高見の場合、荷風とも親しく高見とも懇意な某新聞記者がいて、これが新聞ダネにするために荷風と高見を出会わせようと策動した痕跡は明瞭なのである。ために高見は誤解されたのであって、かれの荷風にたいする嫌悪感はつぎの日記（昭和三十八年六月十六日）でも明らかだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb